

# カムサ語の類別詞と名詞分類の概要\*

蝦名 大助

d-ebina@kobe-yamate.ac.jp

キーワード： カムサ語 南米先住民語 類別詞 派生的 名詞分類

## 要旨

カムサ語は南米コロンビアで話される系統不明の言語である。カムサ語には約 20 の類別詞がある。これらは名詞語根または形容詞語根に付く。類別詞はいくつかの点で派生的な性質を示す。すなわち、一部の例で意味の特殊化が見られることや、指小辞と似た振る舞いを示すことである。一方で、ほぼすべての名詞が何らかの「類別詞クラス」に分類される。このことからみて、カムサ語の文法においては名詞分類が大きな役割を果たしているといえる。

## 1. はじめに

カムサ語 (Kamsá) はコロンビア共和国プトゥマヨ (Putumayo) 県シブンドイ (Sibundoy) で話される系統不明の言語である。Jamioy Muchavisoy (1999: 252) によると、民族人口は約4,000人で、うち30%程度が流暢な話者だという。若い世代への言語継承は不十分であり、民族人口・話者人口ともに漸減傾向にあると考えられる。

先行研究には Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973)、Jamioy Muchavisoy (1999) などがある。Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973) はカムサ語のテキストと文法の概要を扱った研究である。Jamioy Muchavisoy (1999) は動詞形態論について扱った研究である。

本稿ではカムサ語の類別詞の概要について述べる。上記のうち、類別詞については Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973) に記述があるが、その形態・統語的な振る舞いについては詳しく述べられていない。本稿ではカムサ語の類別詞の形態・統語的な性質と、関連して、カムサ語における名詞分類について述べる。

## 2. 文法の概要

本論に入る前に文法の概要について述べる。

---

\* 本論文のもととなる調査は、2015年～2017年、それぞれ8月～9月にかけて約1カ月間シブンドイで行なった。このうち2017年の調査は、文部科学省科学研究費助成事業（挑戦的研究（萌芽））「カムサ語の動詞構造の研究」（課題番号：17K18498）によって行なった。調査協力者は San Felix 地区 (vereda) 出身の60代女性である。調査協力者に感謝したい。

## 2.1. 類型論的特徴

カムサ語は膠着的の性質が強く、形態論が複雑な言語と言われている。接頭辞と接尾辞を持つが、動詞においては接頭辞が優勢である。この点で近隣の言語と異なっている。名詞は接尾辞しか持たない。

格関係はいわゆる主格・対格型である。節の語順は比較的自由だがSVOが一般的である。名詞句の語順は修飾語前置型である。形容詞は名詞型である。人称は1人称に除外形・包括形の区別がある。数は単数・双数・複数を区別する。

## 2.2. 音韻

音韻解釈にはいくつか未解決の問題があるが<sup>1</sup>、現時点で筆者が妥当と考える音素目録を以下に挙げる。

表1：母音

	前舌	中舌	後舌
狭	i		u
中	e	ə	o
広		a	

中舌母音 /ə/ について、蝦名 (2016) では独立した音素ではなく挿入母音と解釈していた。本稿ではさしあたって解釈を修正して独立した音素と考えておくことにする。

表2：子音

	唇	歯茎	後部歯茎	歯茎硬口蓋 <sup>2</sup>	硬口蓋	軟口蓋
無声閉鎖	p [p~ɸ]	t				k
有声閉鎖	b	d				g
無声破擦		ts	ch [tʃ]	tʃ [tʃ~tʃ̥]		
無声摩擦		s	sh [ʃ]	ʃ [ʃ~ʃ̥]		x
有声摩擦			ʒ [ʒ]			
鼻音	m	n			ɲ	
流音		l	r		(ll)	
半母音	w				y	

/ll/ はスペイン語からの借用語のみに現れる音素である。蝦名 (2016) では /x/ の代表的な音

<sup>1</sup> いくつかの音素を認めるかどうか、母音の脱落または挿入の解釈などである。

<sup>2</sup> 先行研究では「そり舌音」とされるが、そり舌性は弱い。

価を [h] と考え、/h/ で表していたが、本稿ではこれを修正して先行研究に従い /x/ [x] とする。

アクセントは句末が高くなる音調で、弁別的ではないと考えられる。ふつう、句末の音節が高いが、音節が長くなると後ろから二番目の音節が高くなることもある。

現地で用いられている表記法はいくつかあって統一されておらず、また研究者によって音韻解釈に多少の違いがあるので、ここでは筆者の表記法を用いることにする。

### 3. 類別詞のリスト

筆者の調査では以下の類別詞が認められた。

-be 「丸い」、tʂ 「やや長い」、-px 「細く硬い」、-xwa 「細く柔らかい・薄い布」、-ya 「服・厚い布など」、-sh 「細いものの集合」、-sha 「葉が多い・いくつかの部分からなる道具」、-x 「身体部位など」、-ʂ 「楕円形・身体部位・茎や幹」、-tʂa 「果実」、-ʂa 「綴じられている」、-iy 「液体・その他」、-ch 「平たく長い」、-cha 「書かれたもの」、-tiy 「木」、-an 「食べ物」、-a 「有生」、-iñ 「場所」、-ok 「入れ物」。

これに対し、Juajibioy and Wheeler (1973: 67-68) は以下の12の類別詞を挙げる<sup>3</sup>。

-bé 「丸いもの」、-tʂe 「楕円形のもの」、-tʂá 「楕円形のもの集合」、-fxa 「硬く長いもの」、-fxwá 「硬く長く滑らかなもの」、-xa 「柔軟で長いもの」、-xwá 「柔軟なもの」、-ʂá 「綴じられたもの」、-she 「古いもの、乾いたもの、壊れたもの」、-shá 「毛があるもの、小さな部分からなるもの」、-kwá 「身体部分」、-ye 「液体」。また、これらに加え、Howard (1973) が挙げるものとして、-ʂe 「厚く四角いもの」、-che 「平たく柔軟なもの」、-chá 「平たく柔軟なものの集合」、-yá 「布」、-nʂe 「光るもの」、-miá 「関節」が挙げられている<sup>4</sup>。

音形の違いは主に語末母音の解釈による。Juajibioy and Wheeler (1973: 67-68) およびこれが引用するHoward (1973) が挙げる例のうち、末尾母音にアクセントがないものは、筆者は子音の開放によって生じることがある音で、音韻的には音素とは認められないと解釈する<sup>5</sup>。類別詞と認めるのが問題と考えられるのは -fxwá 「硬く長く滑らかなもの」と -kwá 「身体部分」である。前者については、kinʂnufxwá 「ろうそく」の一例のみが挙げられているが、これだけで類別詞と認めるには不十分であるし、この一例だけから「硬く長く滑らかなもの」という類別詞をたてるよりも、-xwa が付いていると考えたほうがよいように思われる。後者については、接尾辞とはいえ、語根の一部であると考えられる。たとえば kokwa-tʂ 「手」で kwa は語中に現れており、類別詞とはいえない。

<sup>3</sup> 表記は筆者のものに替えた。

<sup>4</sup> Howard (1973) は Juajibioy and Wheeler (1973) で引用されているが、存在が確認できない。引用の時点では「公刊予定」となっているが、未発表原稿と思われる。

<sup>5</sup> これはアクセントの解釈にも関係する。もしこれらの母音があるとすると、語には語末の音節が高いアクセントを持つものと語末から二番目の音節が高いアクセントを持つものがあり、アクセントを持たない語末母音は脱落することがある、ということになる。これに対し筆者は、アクセントは弁別的ではなく語末が高い音調と解釈する。そして先行研究でアクセントが示された類別詞は形態素末に母音音素があるのに対し、そうでないものは子音の開放時に母音が「聞こえる」だけで母音音素はない、と考える。

表3：カムサ語の類別詞

類別詞	表すもの	語例	先行研究との対応
-be	丸い	tsəm-be 「インゲン豆」、balon-be 「ボール」 xwasha-be 「尻」	-be (J&W)
-tʂ	やや長い	shekwa-tʂ 「足」、kokwa-tʂ 「手」 tʂəma-tʂ 「(生の) トウモロコシ」	-tʂe (J&W)
-px	細く硬い	tʂabwa-px 「指」、koshə-px 「針」 niñə-px 「枝」	-fxa (J&W)
-xwa	細く柔らかい 薄い布	kollar-xwa 「ネックレス」 intʂa-xwa 「薄い布」	-xwá (J&W)
-ya	服・厚い布など	intʂa-ya 「服」、kobsay-ya 「(男性用の) ス モック」、beti-ya 「(女性用の) マント」	-yá (H)
-sh	細いものの集合	bobo-sh 「(動物の) 毛 (集合的)」 txwa-sh 「むしろ」	-she (J&W)
-sha	葉が多い 部分からなる道具	bomo-sha 「ジャガイモの株」 karə-sha 「自動車」	-shá (J&W)
-x	身体部位など	matba-x 「鍋」、stəxna-x 「(長い) 髪」 ʂbxa-x 「下腿」	-xa (J&W)
-ʂ	楕円形・身体部位 茎や幹	xomə-ʂ 「ヤムイモ (の一種)」、betʂa-ʂ 「頭」、 xwatsa-ʂ 「歯」、chiwabnə-ʂ 「(丸太の) 橋」	-ʂe (H)
-tʂa	一部の果実	shashən-tʂa 「野イチゴ」 blandə-tʂa 「バナナ」	-tʂá (J&W)
-ʂa	綴じられている	waya-ʂa 「口」、librə-ʂa 「本」 bʂa-ʂa 「戸」	-ʂá (J&W)
-iy	液体・その他	minʂk-iy 「油」、shəchbw-iy 「涙」	-ye (J&W)
-ch	平たく細長い	bena-ch 「道」、səndrə-ch 「腰帯」 tsbwana-ch 「葉」	-che (H)
-cha	書かれたもの	tsbwana-cha 「書類」、wabeman-cha 「手紙」	-chá (H)
-tiy	木	mashak-tiy 「ナランヒーリヤの木」	
-iñ	場所	jaja-ñ 「畑」	
-an	食べ物	(名詞語根に付く例なし?)	
-a	有生	(名詞語根に付く例なし?)	
-ok	入れ物	(名詞語根に付く例なし?)	

Howard (1973) の例で問題があるのは *-nʒe* 「光るもの」と *-miá* 「関節」である。いずれも語根の一部と考えられ、類別詞とは認められない。後者については、類別詞が約20しかないのに、「関節」を表す類別詞があるとは考えにくいのではないか。

また、後述する類別詞の「一致」がみられるかどうか、類別詞を認定する基準となる。この点からも *fxwá*, *kwá*, *nʒe*, *miá* は類別詞とは認められず、語根の一部と考えられる。

*-tiy* 「木」、*-an* 「食べ物」、*-a* 「有生物」、*-iñ* 「場所」、*-ok* 「入れ物」については先行研究に記述がない。これらのうち *-tiy* は名詞語根に付く例が複数見つかり、類別詞として認めることに問題はない。*-an* と *-a* については名詞語根に付いているのが明らかな例は見当たらないが<sup>6</sup>、形容詞語根に付く例が見られることから類別詞と認めていいと思われる。*-iñ* には名詞語根と形容詞語根に付く例が見つかり、*-ok* には場所格的な機能があるので、先行研究では類別詞に含められなかったのかもしれない。*-ok* については後述する。

#### 4. ホストと類別詞の性質

##### 4.1. 形態論における位置づけ

類別詞は名詞語根または形容詞語根に付く。名詞と形容詞の形態論を概略的に示すと以下のようになる。

名詞語根	- 類別詞	- 数	- 格
形容詞語根	- 指小辞		

図1：名詞類の形態論

後述するように、一つの語根に類別詞と指小辞がどちらも付いたり、数と格の融合が見られることがあるなど、実際の形態論はもう少し複雑である。

図からも分かるように、正確には類別「接尾辞」と呼ぶべきだが、類別形態素が接辞であっても類別詞 (classifier) と呼ばれることが一般的であるため、本稿でも類別「詞」という呼び方を用いることにする。

形容詞は類別詞や指小辞が付いて「名詞化」されることにより、数や格の接尾辞をとれるようになる。(1) では *base* 「小さい」に指小辞 *-tem* が付き、さらに複数接尾辞 *-əng* が付いている。

(1) *base-tem-əng* 「子供たち」

小さい-DIM-PL

<sup>6</sup> *-an* 「食べ物」、*-a* 「有生」についてはそれぞれ一例のみずつ、*ʒbonen* 「スープ」、*intʂa* 「人」が見られる。*intʂa* の *-a* は類別詞と認めてもよいかもしれないが、名詞語根に付く例はこの一例しか見当たらない。*ʒbonen* については *-an* の異形態として *-en* または *-n* を認めるべきか、よくわからない。

名詞と形容詞には統語的な振る舞いの違いがみられる。形容詞はそのままで名詞を修飾できるが、名詞は属格形にしないと修飾できない。名詞（句）は節の直接構成素になれるが形容詞はなれない。類別詞や指小辞が付いて「名詞化」されるようになることができる。

#### 4.2. ホストの性質

上で見たように、類別詞は名詞語根や形容詞語根に付く。しかしすべての名詞語根に付くわけではない。無生物名詞語根のみに付く。ここでいう無生物には、植物や虫が含まれる。人間や動物を表す名詞語根には付かない。また、無生物名詞でも類別詞が付かないものもある。

名詞語根は多くが拘束形式であり、語根形のままでは独立した語を成せない。類別詞が付いて初めて語として成立することができる。一方、自由形式でそのまま語として成立できる名詞語根も少ないながらある。

- (2) tsəm-be 「インゲン豆」
- (3) \*tsəm
- (4) bomo 「ジャガイモ」
- (5) wakna 「牛」

tsəm- は拘束形式であるため、(3) のようにそのままでは語として成立しない。bomo や wakna は自由形式である。ほとんどの無生物名詞語根は拘束形式である。

自由形式には類別詞をとれるものもある。bomo 「ジャガイモ（の根茎）」に対し、bomo-sha は「ジャガイモの株」を表す。wakna 「牛」のように有生物を表す名詞（語根）は類別詞をとれない<sup>7</sup>。

借用語にも類別詞が付く。借用語の中には対応する固有語があるものもあるが（「花」など）、そうではないものもある（「ボール」、「車」など）。筆者の知る限り借用語はすべて拘束形式であり、何らかの類別詞を伴う。

- (6) plor-sha 「花」（plor- < スペイン語 flor 「花」）
- (7) balon-be 「ボール」（balon- < スペイン語 balón 「ボール」）

名詞語根の多くは語根ごとに類別詞が決まっているが、複数の類別詞が付きうるものもある。植物を表す名詞語根が多く、類別詞に応じて「実」や「株」などを表す。

- (8) mashak-be 「ナランヒーリヤ<sup>8</sup>（の実）」
- (9) mashakw-iy 「ナランヒーリヤの汁（ジュース）」

<sup>7</sup> ただし、(21) を参照。

<sup>8</sup> ナランヒーリヤ (naranjilla) : トマト科の果物の一種。

形容詞語根には指示対象に応じてさまざまな類別詞が付きうる。

- (10) xangwan 「腐った」  
 (11) xangwan-be 「腐った (丸い) もの」 (-be クラスに対応する)

数詞や指示詞にも指示対象に応じて類別詞が付きうる。

- (12) kem-be 「これ (この丸いもの)」 (-be クラスに対応する)  
 (13) bənətsan-be 「10個の (丸い) もの」 (-be クラスに対応する)

疑問詞 ndaya 「何」にも類別詞を付けることができる。

- (14) ndaya kem soy 「これは何ですか？」  
 何 この もの  
 (15) ndaya-be 「(この丸いものは) 何ですか？」 (-be クラスに対応する)

なお Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973: 67) にも、「類別詞が指示詞、数詞、形容詞にも付き名詞の代わりに機能する」という記述がある。数詞は何もつかずに名詞句として機能するので名詞の一種と考えられるのに対し、指示詞はそれだけでは名詞句として機能できないので ((14) を参照)、形容詞の一種と考えられる。なおカムサ語では動詞には類別詞が付かない。この点で多くの類別詞を持つ言語とは異なる。

### 4.3. 類別詞の性質

#### 4.3.1. 形態音韻的性質

類別詞の音型は短い。形態音韻的な分析にもよるが、1音節以下である。また、形の上で独立の名詞と関係するものは betiy 「木」と -tiy (「木」を表す類別詞) だけで、これ以外のはっきりとした関係が見られない。つまり、カムサ語の類別詞の起源ははっきりしない。これはアマゾンの言語に見られる類別詞とは状況が異なる。Grinevald and Seifart (2004: 256) は、“Niger-Congo languages do not provide any concrete evidence for the hypothesis of a lexical origin of class markers. This particular feature will be shown to be in absolute contrast with the situation of the Amazonian systems in general.” と述べている。このことはカムサ語の系統関係を考える上で重要かもしれない。

語根と類別詞の境界がはっきりしているものと、そうでないものがある。たとえば、-ch は「平たく細長い」ものを表す。トウモロコシ (植物) を表す şəş に -ach が付いた şəş-ach 「ト

ウモロコシの葉]があるので *-ach* で一つの形態素と認定できるように見えるが、*tsbwana-ch*「葉」と *tsbwana-cha*「紙」のようなペアがあることなどから、本稿では *-ch* を類別詞と認め、*şəşa-* は *şəş* の異形態と考えることにした。また *bi-sha* 「(固有種の) キャベツ」のようにあまりにも短いものも、「語根-類別詞」と分析してよいか疑問が残る。このように語幹と類別詞の境界の認定が難しいことがある。名詞語根と類別詞の形態音韻分析は今後の課題である。

#### 4.3.2. 二重付加

類別詞はほとんどの場合語根に一つしか付かないが、二つ付く名詞語根が一例確認できている。*tsəm-*「インゲン」である。

- (16) *tsəm-be-ş* 「ソラ豆」
- (17) *tsəm-bə-jwa* 「インゲンの蔓」
- (18) *təm-be-sha* 「インゲンの株」

(16) では *tsəm-be* 「インゲン豆」に、楕円形のものなどを表す類別詞 *-ş* が付いて「ソラ豆」という全く別種の植物の実を表している。(17) では、類別詞 *-be* が弱化して *-bə* となっている。もはや *tsəm-be* という二つの形態素であることが意識されにくくなっているのかもしれない。

一方、以下の例では、類別詞 *-be* に類別詞 *-an* が後接しているのか、属格 *-be* に後接しているのか判断できない。

- (19) *chimb-al-bi-an* 「ツリートマト<sup>9</sup>のコラーダ<sup>10</sup>」
- (20) *chimb-al-an* 「ツリートマトのコラーダ」

*chimb-al-* は「ツリートマト」を表す拘束形式であり、もっとも一般的には類別詞 *-be* が付いて *chimb-al-be* 「ツリートマトの実」を表す。*-an* は「食事」を表す類別詞で、一般には粉を溶いたスープなど主食となりうる食べ物を表す。*chimb-al-bi-an* の *-bi* は類別詞にみえるが<sup>11</sup>属格の可能性もある。以下のような例があるからである。

- (21) *kotş-bi-an* (豚-GEN-CL) 「豚肉」

(21) で *-bi* が類別詞と考えることはできない。*kotş* 「豚」に類別詞 *-be* が付くことはありえないからである。名詞語根に属格 *-be* が付き、さらに類別詞が付くことは奇異に思われるかも

<sup>9</sup> ツリートマト (*tomate de árbol*): トマト科の果物の一種。

<sup>10</sup> 小麦粉など穀物の粉をお湯に溶いて甘くしたもの。

<sup>11</sup> *be > bi* は形態音韻変化と考えられる。



しれない。しかし属格形の統語的な振る舞いは、名詞句で修飾語の位置にたつ点で形容詞に似ている。類別詞は形容詞を「名詞化」できることを考えると、属格形に類別詞が付いても不思議ではない。ただし、このような連続は **-bi-an** しか見つかっていない。

#### 4.3.3. 「一致」

類別詞が一致しているように見えることがある。

- (22) kem      chimb-al-be      tamn-be  
 この      ツリートマト-CL      おいしい-CL  
 「このツリートマトはおいしい。」

(22) では主語名詞句と、述語形容詞が一致しているように見える。これは、形容詞がそのままでは節の直接構成要素になれないため、類別詞を付けて名詞化されるからだと考えられる。したがって、文法的な一致というよりも、見かけ上の一致と考えられる。しかし、類別詞の認定や、名詞分類の判定において、この述語形容詞との「一致」は重要な役目を果たす。個々の名詞語根には決まった類別詞しか付かないため、ときに形態素の切れ目の位置や有無が判別しにくいことがあるが、形容詞にはさまざまな類別詞が付くからである。

なお形容詞は修飾語の位置に現れるときには類別詞をとらない。

- (23) tamn      chimb-al-be 「おいしいツリートマト」  
 おいしい      ツリートマト-CL

ときに、類別詞が「一致」しないということが起こる。たとえば **ints̥a-ya** は「服」を表す。**-ya** は「厚い布」または「服」を表す類別詞だが、「服」の場合はどのような生地であってもよい。したがって、

- (24) ints̥a-ya      wa-limpiy-xwa<sup>12</sup>  
 服-CL      wa-清潔な-CL  
 「(薄手の) 服が清潔だ。」

- (25) ints̥a-ya      wa-limpiy-ya  
 服-CL      wa-清潔な-CL  
 「(厚手の) 服が清潔だ。」

<sup>12</sup> 接頭辞 **wa-** が形容詞語根に付くことがある。条件はよくわからない。

のように、類別詞が「一致」しないということが起こりえる。場所名詞についても同様の現象が見られるが、後述する。

#### 4.4. 指小辞の振る舞い

指小辞 **-tem** が類別詞のように振る舞うことがある。類別詞と同じ位置に現れ、見かけ上「一致」する。

- (26) kem mashak-tem tamn-tem  
この ナランヒーリャ-DIM おいしい-DIM  
「このナランヒーリャはおいしい。」

指小辞についても「一致」しないことがある。

- (27) base-tem binch-a  
小さい-DIM 低い-CL  
「子供が背が低い。」

- (28) \*base-tem binch-tem

**base** は「小さい」という意味を表す形容詞だが、指小辞が付くと「子供」を表す。このように指小辞は派生的な性質を持っている。**base-tem** は有生物を表す **-a** とは「一致」できるが指小辞 **-tem** とは「一致」できない。

一方、「一致」してもしなくてもいいこともある。

- (29) kem mashak-tem tamn-tem  
この ナランヒーリャ-DIM おいしい-DIM  
「この（小粒の）ナランヒーリャはおいしい。」

- (30) kem mashak-tem tamn-be  
この ナランヒーリャ-DIM おいしい-CL  
「この（小粒の）ナランヒーリャはおいしい。」

「ナランヒーリャ」は大きさに関わらず「丸い」という性質を保っているため **-be** と一致できると思われる。

#### 4.5. 派生的性質

上で見たように、指小辞には派生的な性質がある (base-tem 「子供」 (小さい-DIM))。一方、類別詞も派生的な性質を示すことがある。形容詞 ptseng 「黒い」に液体を表す -iy が付くと、「コーヒー」を表す。どちらの場合も意味の特殊化が起こっている。

また、指小辞が類別詞的な振る舞いをする点から、両者の類似性が指摘でき、この点からも類別詞は派生的と見ることができる。

また、一つの名詞語根に類別詞と指小辞、両方が付くことが可能である。その場合、「名詞語根-類別詞-指小辞」という順序になる。

(31) chimbal-be-tem (フルーツトマト-CL-DIM) 「フルーツトマト (の実)」

chimbal-tem も可能である。この場合「小さなフルーツトマト」という意味になる。一方 (31) では指小辞 -tem の付加によって「かわいらしさ」というような意味合いが加わるという。いずれにせよ、形態論的に指小辞よりも語根に近い位置に現れることから、類別詞は派生的であるといえるかもしれない。

一方で、すでに見た以下のような例があることから、接尾辞の承接関係はあまり重視すべきではないかもしれない。

(32) kots-bi-an (豚-GEN-CL) 「豚肉」

-be には属格的な機能があるが、(32) のように類別詞が後接しうるからである。

#### 5. 場所名詞と場所「格」

場所を表す名詞は類別詞 -iñ と「一致」する。jaja-ñ 「畑」のように類別詞を伴う名詞もあるが、そうではない場所名詞が多い。

(33) jaja-ñ boxoxw-iñ  
畑-CL 乾いた-CL  
「畑が乾いている。」

(34) tsbatsana+mama boxoxw-iñ  
大地 乾いた-CL  
「大地が乾いている。」

- (35) kem taban-ok tsəm-iñ  
この 町-LOC 新しい-CL  
「この町は新しい。」

(35) で *taban-*「町」は *-ok* を伴って現れている。*taban-* は拘束形式で、*-ok* などの接尾辞を伴わないと語として成立しない。(36) に見られるように *-ok* には場所格的な機能がある。

- (36) atʃ taban-ok sə-n-ts-əmn  
1 町-LOC IMPF.1.SUBJ-DI-PROG-いる  
「私は町（もしくは「シブンドイ」）に住んでいる。」

- (37) atʃ taban-oy sə-n-ja  
1 町-ALL PF.1.SUBJ-DI-行く  
「私は町（もしくは「シブンドイ」）に行った。」

*-ok* を場所「格」接尾辞と見ることができる理由は、(37) のように他の格接尾辞的なものと交替できるからである。(37) で *-oy* は方向を表している。

このような場所名詞には、*taban-ok*「町」あるいは「シブンドイ」、*binʒ-ok*「サンフランシスコ<sup>13</sup>」、*ts-ok*「家の中」などがあり、固有名詞も含まれる。拘束形式に付いてこれを自立形式にするという点で、場所格接尾辞と類別詞は似ている。場所格接尾辞はあまり格らしくない、といえるかもしれない。

また、以下の例で *-ok* は類別詞として機能しているように見える。

- (38) bochuk tsəm-ok  
籠（の一種） 新しい-ok  
「籠が新しい。」

*sbarok*、*biyak*、*bochuk* はいずれも「籠」を表すが（それぞれ種類が異なる）、いずれも *-ok* で「一致」する<sup>14</sup>。この *-ok* と場所格の *-ok* を同一形態素と見るべきかどうか、まだ十分な証拠がなくよく分からない。場所格についてこれ以上詳しく述べることは本稿のテーマから外れるのでやめるが、ここでは類別詞との類似性を指摘しておきたい。

<sup>13</sup> シブンドイの隣町。

<sup>14</sup> またこれらの名詞に *-ok* が付いているかどうかとも判断が難しいが、場所格接尾辞であれば機能に応じて交替するのに対し、これらの名詞では交替できないと思われるので、ここでは *-ok* が付いていないと分析しておく。

## 6. 自立形と名詞分類

すでに述べたように、いくつかの名詞語根は類別詞を伴わず、自立形である。しかしそのような語のほとんどは類別詞との「一致」が見られる。たとえば有生名詞はすべて（一例はつきりしない語があるが<sup>15)</sup> 自立形だが、これらは **-a** と「一致」する。

- (39) kem keş tseng-a  
この 犬 汚い-CL  
「この犬は汚い。」

なお太陽や月も有生名詞扱いされる。

- (40) shin3 botaman-a  
太陽 美しい-CL  
「太陽がきれいだ。」

液体を表す名詞は **-iy** と「一致」する。たとえば、**buyesh** 「水」や **buiñ** 「血」は **-iy** と「一致」する。また上で見たように場所を表す名詞は **-iñ** と「一致」する。

ここで注目されるのは、**bomo** 「じゃがいも」、**ingo** 「アラカチャ<sup>16)</sup>」、**bobia** 「カンナ<sup>17)</sup>」、**chikna** 「櫛」などの名詞である。これらは「液体」ではないが、**-iy** と「一致」する。つまり、**-iy** は液体を表す類別詞であることに加え、ほかのいずれにも属さない名詞が属する類別詞グループであると考えることができる（「ゴミ箱クラス」）。

- (41) kem bomo morska oxatan-iy  
この じゃがいも 今 収穫する.PART-CL  
「このじゃがいもは今収穫されたばかりだ。」

筆者が確認できた、「一致」が見られない名詞は **yebn** 「家」の一例しかない。ということは、ほとんどの名詞は何らかの類別詞に対応する、ということである。

すなわちカムサ語では、類別詞クラスにもとつきある種の名詞分類が行なわれているといえる。Corbett (1991) によれば、このような現象が文法的ジェンダー（あるいは名詞クラス）と呼ばれるためには、文法的な一致がなければならない。カムサ語の類別詞の「一致」は、文法的な一致とみるには問題があるように思われる。類別詞付加によって形容詞が名詞化されているだけであり、あくまで見かけ上の一致であると考えることができるからである。しかしそうは

<sup>15)</sup> **intša** 「人」は **-a** が付いているようにも見えるが、これ以外に同様の例は見当たらない。

<sup>16)</sup> 根茎を食用にする。

<sup>17)</sup> ショウガに似る。根茎を食用にする。

いっても、類別詞による分類にもとづいてほとんどの名詞が何らかの「名詞クラス」に分類されることも事実である。Grinevald and Seifart (2004) はジェンダー・名詞クラスを、文法化が進んだものからそうでないものまで連続体としてとらえることを提案している。カムサ語の類別詞・名詞分類についても、このような視点でとらえることができるかもしれない。

## 7. まとめ

本稿ではカムサ語の類別詞と名詞分類について概観した。先行研究で指摘されている14の類別詞に加え、新たに五つ類別詞を認めた。また先行研究で類別詞とされているいくつかの音形については類別詞と認めるべき根拠がないことを述べた。

類別詞とホストについて、形態的、形態音韻的、統語的性質を述べた。形態音韻分析がまだ進んでいないことは今後の課題である。類別詞と指小辞の類似点や、類別詞が派生的な振り舞いを示すことを指摘した。

場所名詞が他の名詞と異なる振り舞いを示すこと、また場所格と類別詞の類似点を指摘した。場所格が類別詞と似た性質を示すということは、カムサ語の名詞形態論において、派生と屈折が明確に区別できない可能性を示唆するが、このことも含め、場所格については稿を改めて述べたい。

カムサ語では類別詞による分類にもとづいて名詞分類が行なわれている。類別詞自体は派生的な性質を示すものの、名詞分類はほぼすべての名詞について行なわれており、この点で単なる派生として片づけられない。また上で述べたように、そもそも派生と屈折を区別することがカムサ語の名詞形態論では意味がない可能性もある。カムサ語における名詞分類といわゆるジェンダー・名詞クラスとのあいだにどのような共通性が見られるか、今後考察を進める必要がある。

## 略号一覧

-: 前接または後接する要素が接頭辞または接尾辞	GEN: 属格 (GENitive)
+: 複合語境界	IMPF: 未完了 (IMPerFect)
1: 1 人称 (1st person)	LOC: 場所格 (LOCative)
ALL: 方向格 (ALLative)	PART: 分詞 (PARTiciple)
CL: 類別詞 (CLassifier)	PF: 完了 (PerFect)
DI: 直接情報 (Direct Information)	PL: 複数 (PLural)
DIM: 指小辞 (DIMinutive)	PROG: 進行相 (PROGressive)
	SUBJ: 主語 (SUBJect)

## 出典の略号

H: Howard (1973)

J&W: Juajibioy Chindoy and Wheeler (1973)

### 参考文献

Corbett, Greville (1991) *Gender*. Cambridge: Cambridge University Press.

蝦名大助 (2016) 「カムサ語の動詞における人称標示—肯定形の場合」 『日本言語学会第152回大会予稿集』 .

Grinevald, Colette and Frank Seifart (2004) Noun Classes in African and Amazonian Languages: Toward a Comparison. *Linguistic Typology* 8(2): 243-285.

Howard, Linda (1973) *Grammar Analysis of the Camsá Language*. (未発表原稿か)

Jamioy Muchavisoy, José Narciso (1999) La lengua kamëntsa: estructuras predicativas. In *Lenguas aborígenes de Colombia, Memorias* 6, 251-284. Bogotá: Universidad de los Andes - CCELA.

Juajibioy Chindoy, Alberto and Alvaro Wheeler (1973) *Bosquejo etnolingüístico del grupo kamsá de Sibundoy*. Bogotá: Instituto Lingüístico de Verano.

## An Outline of Kamsá Classifiers and Noun Classification

Daisuke EBINA

d-ebina@kobe-yamate.ac.jp

Keywords: Kamsá, South American indigenous language, classifiers, derivational, noun classification

### Abstract

Kamsá is a language isolate spoken in the town of Sibundoy, Colombia. Kamsá has about 20 nominal classifiers which are attached to a nominal/adjectival root. These classifiers show some derivational properties in the following sense; in some cases we find semantic idiosyncrasies, and they show some resemblance to the diminutive. On the other hand, almost all the nouns are classified according to “classifier classes”. In this sense, the noun classification plays an important role in the Kamsá grammar.

(えびな・だいすけ 神戸山手大学)